

令和5年度 学校研究 推進計画

1. 研究主題 「確かな学力」を身に付けるための「個別最適な学び」へ

2. 主題設定にあたって

一昨年度から2年間かけて「教科の本質的なおもしろさを感じさせる授業づくり」を主題とし、生徒が教科を好きになる授業を目指した。教師はファシリテーターの役割を担い、学習者である生徒が主体となった、生徒同士の学びの場を大切にする授業、学習者中心の授業である。

結果、教師と生徒が目標・ゴールを共有しながら、「魅力ある課題」「挑戦する課題」が設定された授業、「協働的な学習」で学習が学習者の発言や関わり合いを中心に展開される授業、学習者がよりよい聞き手・話し手として活動する場面のある授業、等々が実践されてきた。

そんな中で見えてきた課題は、協働的に活動する中で「自分の意見に自信が持てない」「すぐ答えを聞いて考えようとしなない」「自分で課題が決められない」といった生徒の姿である。生徒が課題を自分事にし、何がわかっていないのかがわかり、それを解決するにはどうするべきかを考えられる、個人の資質・能力が伸びるような授業展開（個別最適な学びを意識した授業展開）が必要であると思われたので、昨年度まで実践してきた学習者中心の授業を継続しながらの研究主題（仮）を設定した。

3. 日々の授業・研究推進に臨むうえで共有しておきたいこと

(1) 前年度まで実践してきた授業改善の継続をする

①生徒と教師の目標の共有

学校教育目標：「鳥海の高さに向かい、持続可能な未来を拓く生徒の育成」

授業で大切にしたいこと：「One Team ～授業はみんなでつくる～（準備→授業→展望）」

身に付けて欲しい力（教科ごと）：教科コンパスを作成。

これらを共有して教師と生徒が常に同じゴールに向かう。

②魅力ある授業づくり

・「魅力ある課題」「挑戦する課題」の設定

特に生徒自身の発意によって学ぶような課題（ジャンプの課題）の設定（教科間で連携しながら）

→「教科の本質的なおもしろさの感得」

・生じた新たな課題からの「探究的な活動」ができるような単元構成の工夫

・生徒が対話しつづやき関わりながら進む課題や場面のある授業

③学習者主体の授業づくり

・単元の指導計画・評価計画を生徒に明示

・「協働的な学習」の中で、学習（学習過程）が生徒たちの発言や関わり合いを中心に展開

・授業の振り返り→自身に必要な学習の計画、実行・・・そのためのスケジュール手帳指導

(2) 確かな学力の定着のための個別最適な学びに向けて

① 確かな学力とは？授業者が理解しておくべきこと

〔生徒全員が到達すべき評価B、3の基準はどこなのか？〕←これを授業者は正しく把握する必要がある。Cや1・2の生徒に授業者は指導助言し、生徒は努力して、Bや3に改善したい。それができたら、「できた」「学力が身についた」。(Aや4、5は、特別によくできた状態であり、全員に到達させたいものではない。)

〔評価について〕授業の中で評価する各観点の個々の評価(A、B、C)はその時点でのその学習に対する評価(形成的評価)。単元全体や学期の学習内容が終わったときにCがBに改善されるよう形成的評価を指導に生かしながら授業を進め(指導と評価の一体化)ていく。

② 個別最適な学びのためには

〔一斉指導の授業は〕・学習者が自分の学習状況を客観視しにくい。(わかっている自分や何がわかっているかを把握しにくい。)
・課題を自分事とし、主体的に解決しようとする意欲を持ちにくい。

◎だから、生徒主体の授業！

〔他教科との関連〕・他教科での学び、知識が課題解決のきっかけ、解決の手段になりうる。大切。

③ 自己調整力とは？

個別最適な学びに至るには、学習者に自己調整力が必要である。今の自分の到達点を理解しているからこそその自己調整。生徒に、「できない自分」を理解させなければいけない。

4. 今後の予定

(1) 進め方

年3回の校内授業研究会を設け、2回は教科の授業、1回は総合学習の授業とする。教科の授業では各回2名が、総合学習の授業では各学年1名計3名が、授業を提案する。

(2) 校内授業研究会(指導：山形大学 准教授 森田智幸先生)

6/9(金)校内授業研究会① 授業者：荘司 明信(国語)、後藤 早苗(理科)

9/28(木)校内授業研究会② 授業者：未定

11/16(木)校内授業研究会③総合 授業者：未定

(3) 授業研究会での重点

①授業者は、3. 研究の基本方針 の(1)の②と(2)の③(網掛けの部分)のどれかを重点にした授業を提案する。

②参観者が事後研修会で意見交換がしやすく研修がより深まるように、授業者はその授業における「ターゲット生徒」を1、2名指定する。